

「一つの可能性」

キルケゴールは『人生行路の諸段階』の中で、「一つの可能性」という不気味な短篇小説を書いている<sup>(1)</sup>。

コペンハーゲン郊外のある町に、記帳係と呼ばれた男が住んでいた。彼は毎日午前 11 時から 12 時の間、孤児院橋と海岸通りを何度も往復することで、町の人々に知られていた。彼は普段はとても穏やかな人間で、とりわけ子供たちを見ると優しい顔つきになるのだった。だが、この時間帯は誰が話しかけても何も答えず、まるで何かに憑かれたように見えた。そう、彼はある思いに取り憑かれていたのである。いつだったか若い頃、彼は悪友たちに誘われてある場所であることを行った。その結果、ある決定的なことが起こったに違いない、そんな確信が彼に芽生えた。彼は自分によく似た顔の子どもがいなかったか、いつかそつと子供たちの顔を見るようになった。だが、それが分かる手立てはどこにもなかった。彼は精神病になって、同じ時間に何度も孤児院橋と海岸通りを行き来するようになり、やがて病気になるまで死んだ。

この男が取り憑かれていたのは、一つの可能性であった。しかし、その可能性は決して現実性にはならない、どこまでも単なる可能性であった。しかもそれは、彼が自らの心の中から作り出した可能性であった。彼はその可能性の中で、ついに自らの精神を食い尽くされてしまったのである。キルケゴールは、可能性というものが持つ無限ループのような恐ろしさについて示唆している。

可能性と人間の不安

我々は通常、可能性はあくまで単なる可能性に過ぎず、現実性が持つ重みは持たないと考えている。果たしてそうだろうか。キルケゴールは『不安の概念』の中でこの問題を掘り下げた。彼によれば、可能性はいつか現実性になりうるから可能性と言われるが、まさに可能性なるがゆえに本質的に無限であり、いくらでも可能であるという性格を持つ。そのことが人間を「不安」に引き込んでしまう。一方、現実性は現実性であるに起こっている事実であって、それは本質的に有限であり、ただ一つだけしかない。だが、可能性は可能性なるがゆえに何物にもなっておらず、また何事もそこで起こってはいない。まさにその「ない」(無)が人間を不安に陥れるのである。そして、その可能性とは多くの場合、人間が自らの心の中から作り出すのである。

心気症の患者の場合が好例だ。彼は自分が病気になるのではないかと不安でたまらないが、いったん病気になるという現実を受け入れたならば、これに全力で取り組むことができる。どれほど重大な現実性であっても、自分が作り出した可能性よりは絶対に恐ろしくないのである。

しかし、可能性を持つことは、人間が人間である証しである。というのは可能性こそが人間が自由であること、人間の主体性を意味するからである。それゆえ可能性のために不安に襲われても、そのことこそ自由の存在理由であるとして、その不安と正しく向き合うことが、人間が人間らしく生きていくことにもなるのである。可能性と現実性の間にはこのような逆説的關係があり、それさえ了解していれば、自らの作り出した可能性の

中に自分自身を見失うことはない。キルケゴールはそのように語っているのである。

コロナ禍での可能性と現実性

このところ、第三波とも言われる新型コロナウイルスの急激な感染拡大により、我々は不安な日々を過ごしている。自分も感染するのではないかと、感染したらどうなってしまうのか。この不安は現実性に根差した正当なものだ。しかし、相手が目に見えないウイルスだけに、人々の心の中で不安感ばかりが増してしまう恐れがある。その結果、コロナストレスやコロナうつに苛まれる人々も現れる。また、根拠のない情報が拡散して、感染者や感染者が属している組織に対する偏見を助長し、差別を誘発する。マスクをしているかどうか相互監視が強化され、“自粛警察”が睨みをきかす。こうした風評被害や集団パニックはすでに一部では実際に起こっている。

不確実な情報も飛び交っている。納豆がコロナを予防するという情報が流れた時、スーパーの店頭から納豆が品薄になった。イソジン(うがい薬)がコロナ感染を防ぐという情報が流れた時もそうだった。この時は某知事が緊急記者会見まで開いて発表したために、とりわけ大きな波紋を広げた。納豆に免疫力を上げる効果があるのは確かだし、イソジンが口腔内を殺菌消毒できるのもその通りである。しかし、だからといって、これらによって直ちに新型コロナウイルスに打ち勝てるものではない。少し冷静になって考えればすぐ分かることであるが、我々はおもすれば情報の奔流に押し流されてしまい、余裕をもって考えることがなかなかできないのである。

こうした事態は、人間の心がいかに容易に不安になりやすく、その不安感もいかに容易に増幅するものであるかを示す格好の事例である。なぜなら、不安というものこそ可能性を前にした人間の心的態度だからである。人間はあらゆる可能性について思いめぐらすことができるし、それによっていかなる行動も取ることができる。そのことは、まさに人間の自由と主体性を証しするものである。だが、問題なのは、その可能性がどこまで現実性への繋がりを持っているかということだ。現実性に繋がる回路がなければ、せつかくの人間の自由も主体性も、可能性の中で徒に空回りするしかない。

高度情報社会の現代、さまざまな情報が飛び交っているが、我々はここで少し立ち止まって、押し寄せる雑多な情報から距離を置くのも必要なことであろう。重要なのは、不安を煽るような不確かな情報ではなくて、現実的な対応を可能にしてくれる確実な知識である。現実的な対応とは、この場合、適切な予防・適切な治療のことである。現実的対応であれば、それに集中して全力で取り組み、一定の効果を上げることができるだろう。コロナ禍のただ中にある今だからこそ、キルケゴールによる可能性と現実性をめぐる議論についてじっくりと考えてみてはどうだろうか。

[註]

(1) キルケゴール『人生行路の諸段階』(中) (『キルケゴール著作集』第 13 巻)、佐藤晃一訳、白水社、245～266 頁。